# [redacted]

中山義秀

大輪君と相識ってから、十數年になる。[redacted]大輪君が詩を發表するまで、私は君が詩人であることを知らなかった。君もまた詩人を名乗ったことはなく、詩人らしい體裁をよそほったこともない。

私が知ってゐたのは、君が情熱兒だったことである。對象のさだまらぬ、夢みる孤独な情熱は、燐のやうに冷く燃え、おなしく消えさる。

その悲哀と憂愁と[redacted]を胸中につゝんで、詩人らしく ふるまはなかったところに、君の詩人たる真骨頂がある。私がそれに氣づかなかっただけだ。

かういの詩ふ言ひ方をすれば、人はみな詩人となるとあた事實ごろでもある。でなければ、詩が萬人の心に觸れる筆がない。だが文